

真名本『曾我物語』の狩場についての一考察

水 谷 巨

はじめに

仮名本『曾我物語』と比べて真名本『曾我物語』が、狩猟という行為乃至は狩場という場をきわめて重視しているという問題については、かつて福田見氏が巻五の浅間の狩説話を題材に論じられておられる^①。そして近年では、大津雄一氏が歴史的状況とのかかわりにおいて兄弟の仇討行為が如何に描かれているかを見究めようと、その狩場を論じている^②。これら先学の御論考は、たしかに真名本『曾我物語』の成立基盤を考える上で、またその作品の構成の問題に言及する上で、大きな意味をもつものである。ややもすれば、享受者に対して、退屈感だけを与えることになりかねないこの狩場の記述が、実は作品内部と綿密な関係を保ちながら、ストーリーを展開させていることを知った時、我々は、何故、かの編者がこれほどま

でに狩場に執着するのか、その意図を読み取ることが出来るように思われるのである。

そこで本稿は、主に福田・大津両氏の御論考に導かれつつ、物語における狩猟及び狩場のその存在意義について、ささやかな考察を試みたいと思う。

一、仇討ちの動機、つけとしての狩場

まず、兄弟の仇・工藤助経を討つこととなるそのきっかけともいえる場面から見てゆくことにしよう。

真名本『曾我物語』において、初めて狩場が登場する箇所は、従来、巻一の伊豆の奥野の狩場が指摘されてきた^③。がしかし、実はその前にもう既に一度狩場のことが描かれている箇所がある。それは、伊藤武者助継が死亡する場面である。

伊藤武者助継、生年四十三と申す夏の比、狩庭より返る道にて重病を受けて、日数を経るままに、いよいよ重くなる間、九つになる金石を近付けて、手に手を取り組みつつ、額を合わせ、助継泣く泣く申しけるは、「己が未だ十歳にも成らざるを見捨てて死ぬる事こそ悲しけれ。」(十一頁)^⑤

つまり、助継が四十三歳の夏の頃、狩場の帰り道で重病になり、日数を経るうちにいよいよ病は重くなり、ついに七月十三日の寅の刻に死亡するという場面である。

ここで真名本『曾我物語』のいう狩場が、具体的にどこであるのかは、一切わからないものである。しかしながら、この伊藤武者助継の死が、後の物語の展開にきわめて重要な意味を持つものであることは間違いない。すなわち、彼の死によって、かねてより彼とは仲の悪かった兄弟の祖父である河津次郎助親が、本来ならば助継の子である金石(後の工藤助経)の受け継ぐべき領地を横領し、それがきっかけで、今度は助経が助親の子、すなわち兄弟の父である河津三郎助通を討つこととなるから、この助継の死が兄弟の仇討事件そのものの発端となっていることは間違いない。

そこで、この事件の発端といえる伊藤武者助継の死の原因が、狩場の帰り道での病であることは重要である。^⑤つまり、狩場での仇討を主題とする真名本『曾我物語』は、事件そのものの発端をも狩場

にかかわらせながら描いているのである。

本書において次に狩場が登場するのは、助経が大見小藤太・八幡三郎の二人に命じて、兄弟の父・河津三郎助通を討つこととなる奥野の狩場の場面である。いまさら言うまでもなく、その後、兄弟が父の仇討を行なうこととなる直接のきっかけとなる箇所である。

ところがここで大見・八幡の二人は、助経から「助通を討て」という命を受けたわけではないのである。助経の元来のターゲットは助通の父、兄弟からすれば祖父にあたる河津次郎助親のほうであった。つまり、助通は、父・助親のいわば代用として討たれたのであった。これは、いかにも兄弟の仇討行為を正当化しようという編者の作為と読み取れはしまいか。すなわち、物語はその前において助経の仇討行為を正当化しようと河津次郎助親の領地横領という悪業を記している。ここで兄弟がそのまま仇討を行なったとすれば、兄弟は助親という悪業を行なった者の側人間として描かれることになりはしまいか。そこに何の関係もない父・助通を登場させて、その関係のない人間が討たれたというワンクッションを置くことによって、兄弟は、悪業を行なった者の側から解放され、その仇討行為が正当化されるわけである。しかも、関係のない人間を討つというところで、本来ならば悪者として描かれるはずである工藤助経にしても、直接手を下したのを大見・八幡に設定することによって、彼

が直接の悪者であるというイメージはやわらいでいるのである。

話を本題に戻そう。ここで注目しておきたいのは、助経の命を受けた大見・八幡の二人が、元来のターゲットである河津次郎助親を狙うのであるが、その奥野の七日間の巻狩において二人は、「七日の間は、夜も日も付け廻れども、一矢射るべき隙こそなかりけれ。」(二五頁)といったような状況であったということである。これは、後述する兄弟が狩場ごとに助経を討とうとして狙うが隙がなく、ごとごとく討てないでいる場面と重なってこよう。かくして、先述の領地横領の恨みを助経は、河津次郎助親の子・三郎助通を討つことによつて晴らしたのであった。

狩場の帰り道にておこつた病を發する領地争いの恨みを、助経は再び狩場の帰り道にて晴らしたのであった。

しかしながら、その河津三郎助通を討つた大見小藤太と八幡三郎の二人も、巻二において、

「汝、大將軍として鹿野の莊に馳せ向かひつ、奴原をば生執りに為つ、河津が墓の上に切り懸けて我に見せよ。」(三二頁)

という伊藤入道の命を受けた伊藤九郎によつて討たれてしまうのであった。場所は、狩野の莊においてであつた。ここには、「狩場」という言葉こそないが、そこに記されている「狩野」とは、岩波日本古典文学大系の注によれば、現在の静岡県田方郡修善寺町・天

城湯ヶ島町付近であり、当時においては、その字からも察せられるように、有名な狩場であつた。^⑦

この大見・八幡の二人が討たれた狩野が狩場であつたことを、かの真名本『曾我物語』の編者が意識していたか否かはわからない。けれども、編者の意識するしなやかかわらず、助経の命を受けて狩場の帰り道に助通を討つた二人が、今度は狩野という狩場として有名な地において討たれたという事は、享受者にとつて深く印象付けられたものであつたに違いないと思われるのである。

以上、兄弟がその仇討行為を決意するきっかけとなる箇所を見てきたわけであるが、このことから明らかなように、真名本『曾我物語』においては、まるで固執するかのようには狩場を描き続けながら、兄弟の仇討行為の動機づけを行なうのであつた。換言すれば、兄弟の仇討は、そのきっかけから一貫して狩場にかかわりながら進められているのである。

二、仇討達成まで

右で見てきたように、奥野の狩場の帰り道にて父を失つた兄弟は、打倒助経の思いを胸に秘め、ごとごとく彼を狙うのであつた。

さてそこで、次に狩場が物語に登場するのは、実質上は巻五においてであるが、実は言葉の上だけで言うと、その直前の巻四の頼朝

が箱根参詣を行なう場面において、五郎（箱王）の伴の僧の言葉のなかに、狩場のことが語られているのである。

（故・河津三郎助通は、）音に聞こへし相摸の国の住人、鎌倉の権五良景政の末葉、大庭の三郎景親が舍弟に俣野の五郎景久と云ふ大力と、一年伊豆の奥野の狩庭返りの時、片手を放ちて連け様に二番まで勝ちたまひてこそ、相摸（まも）の名誉并に大力の褒美をば挙げたまひしか。然れども、其れを最後の御遊びと為て、敢へなく討たれさせたまひぬ。（七七頁）

この言葉を聞いた五郎（箱王）は、打倒助経の思いを一層強固なものとするのであったが、これはそれと同時に物語の享受者の側にも、先の奥野の狩場においての助通の死を思い起こさせ、そのことが兄弟の仇討行為の直後のきっかけとなったものである。ことを再確認させるものであり、また狩場というものの物語全体の中での印象をより強いものにしようとしているようである。しかもこの場面、巻一での事件の発端から、兄弟の仇討そして死という巻九までのほぼ中間あたりに配置されていることから、狩場での恨みを狩場にて晴らすという物語の構成を、享受者に対して再確認させ、より印象深いものとしようとしているように思われるのである。

次に巻五における狩場について考えてみよう。すなわち、三原・長倉の狩場についてであるが、真名本『曾我物語』はその直前に、

「畠山重忠の鷹談義」を配置している。これについては、福田氏の御論考があるが、この場面を要約すると、梶原景時が、「鷹狩りは罪業である。」と言ったのに対して、畠山が天竺・震旦・本朝の事例を挙げながら、決してそうではないことを説く場面である。その頼朝と梶原・畠山の会話に注目してみよう。頼朝の「狩庭廻りは罪業とは聞けども、男の一の栄花は狩庭には過ぎじと覚えたり。何か有るべき。」（九四頁）という質問に対して、梶原は「狩庭は罪業とは覚え候はず。」として、

○天竺の毗睨璃王の醉象の巻狩。

○釈尊因位の鹿母狩。

○震旦の胡深王の虎狩。

○秦の始皇の鶴頭の双狩。

○本朝の考照天皇の七日の巻狩。

○諏方の大明神の伊吹の嶽の七日の巻狩。

といった三国の故事を引用しながら、武将にとって狩場が、如何に由緒深いものであるかを説くのである。また、畠山も「ただし、鷹狩りは罪業である。」という梶原の言葉に対して、真名本にして約三丁半もの紙面を割いて、鷹狩りが決して罪業ではないことを説くのである。これについて福田氏は、

畠山の名譽を言いたかったというよりも、獸肉食すべからず

の思想が次第に高まりつつあった世に、鹿狩・鷹狩などの狩の業が決して罪業でないことを作者語り手はあえて梶原・畠山の口を借りて申し述べたのだと思われる。

と指摘されている。つまり、これから頼朝が、助経が、そして兄弟が舞台とすることになる狩場、そしてその狩場にて行なわれることになる狩猟が、決して罪業ではないことをかの編者はここで一度断っておく必要があったと考えられるのである。それは、口悪い言い方をすれば、この編者の言い訳が、これから連々と続けられる狩場の場面の直前に配置されていることから容易に想像されよう。真名本「曾我物語」の狩場にこだわる姿勢の一端が見受けられる部分である。

さて物語はその後、三原・長倉の狩（巻五）から那須野の狩（巻六）へと展開してゆくのであるが、この真名本巻五後半から巻六前半にかけて記されている兄弟の行動というものは、大津雄一氏が指摘されているように、まったく同じパターンで綴られているのである。すなわち、兄弟は、その道中にて、また狩場にて、ことごとく助経をつけねらうのであったが、助経が頼朝のそばに在ることから、自然と頼朝の護衛が助経をも護衛してしまうことになり、兄弟は助経を討つことが出来なくなってしまう場面である。この部分、少々引用が長くなるが、例として頼朝が三原の狩場へとおもむく場

面から抜き出してみることにしよう。

その夜は、本間・渋谷・三浦・横山・松田・河村・洪美・早河・稲毛・榛谷・江戸・州崎の人々、用心禁しくして君を守護したてまつれば、少しの隙こそなかりけれ。（中略）その夜は、人間の河の宿にて夜も竟ら馳へども、仙波・河越・金子・村山の人々、用心禁しくして君を守護したてまつれば、少しの隙こそなかりけれ。（中略）平山・猪俣・本田・吉見・足立・柄子・野本の人々、用心禁しくして君を守護したてまつれば、少しの隙こそなかりけれ。（中略）伴沢を始めとして、丹・児玉・久下・村岡・熊谷・中条・豊嶋・笠井の人々、用心禁しくして君を守護したてまつれば、少しの隙こそなかりけれ。（中略）その夜は夜も竟ら、山名・里見・高山・小林・多胡・小幡・丹生・高田・瀬下・黒河の人々、用心禁しくして君を守護したてまつれば、少しの隙こそなかりけれ。（中略）その夜は、夜も竟ら馳へども、大井・伴野・志賀・平賀・置田・内村の人々、用心禁しくして君を守護したてまつれば、少しの隙こそなかりけれ。（九七頁）

と一部分だけを抜き出してみても、まるでたたみかけるような同一パターンで兄弟の行動及び警護の状況が描かれていることがよくわかるのである。

このような強烈なまでの同一パターンの繰り返しは、享受者に対して、兄弟の助経への執念を一層強く感じさせるとともに、兄弟の狩場への執着、すなわち、狩場の仇は狩場で討つという気持ちをも深く印象づけようとする作用を担っているようにさえ思われるのである。

ところで、この巻五後半から巻六前半にかけての一連の狩場の描写を見てゆくと、そこに描かれている兄弟の姿というものは、いま見てきたような助経を討とうと狙うが果たせずという記述以外には、巻六の冒頭の一部分をのぞいては、ほとんど見出だすことが出来ないのである。そこでいま試みに、兄弟に関する記述をこの巻五後半から巻六前半のこの部分から削除してみると、そのあとに残るものは、狩場における頼朝の讚美譚以外のなものでもないことがわかるのである。すなわち、

○海野小太郎の名誉とそれに対する頼朝の行動。^⑧

○那須野における宇津宮朝綱の女房の賢女ぶりとそれに対する頼朝の行動。

などである。ここからやや強引に想像の枠を拡張してみると、口承か書承かは別にして、先ず、頼朝とかかわる海野の名譽譚や宇津宮の女房の賢女譚といったようなものが存在していて、そこに兄弟に関する記述である「その夜は、——少しの隙こそなかりけれ。」が、

所々に置かれていったのではなかったか、といったようなことが考えられるのである。もしそうであったとすれば、真名本『曾我物語』の編者は、意識的に狩場の場面を物語のなかに挿入し、かつそこに兄弟が助経を討とうとつけねらう姿をちりばめていったことになる。そして、そうすることによって先に述べたような兄弟の狩場に対する執着というものを、より強烈に描きだそうとしているように読み取れるのである。

さて、いよいよ建久四年五月の富士の裾野の巻狩へと移ってゆくことにしよう。

「東国には狩庭多しと雖も、富士野に過ぎたる名所はなし。」（一〇九頁）この頼朝の言葉からも察せられるように、今までの三原や那須野に比べても、この富士の裾野は狩場としては最高の地であって、従ってここで行なわれたこの巻狩は、当時の武士たちにとって、きわめて重大なイベントであったはずであり、また人々においてもその関心はきわめて高いものであったと考えられる。

この巻狩が行なわれることを知った兄弟は、これこそ神が我らに与えたもうた最後のチャンスとばかり、決死の覚悟でそこに参加するのであった。ここにおいて兄弟は、大鹿の大王二頭と遭遇することにあいなる。しかしながら、二人はこれを故意に逃してしまうのであった。そしてその次に現われたのは、猪の大王であった。そこ

で今度はそれを新田四郎忠経が、見事に射止めたのであった。(巻九)

五味彦彦氏は、その御著『吾妻鏡の方法』のなかで、真名本『曾我物語』の特徴のひとつとして、本書の歴史の構図が対立的な捉え方になっている点を指摘されている。^⑨これは兄弟と助経という大きな対立のみならず、本書の端々に現われるさまざまなものに対してあてはまることである。そしてこのことはやはりここでも、

○大王を故意に射止めなかった兄弟。

○大王を見事に射止めた新田四郎忠経。

というかたちで認められるのである。しかも、その新田四郎とはその後、兄・十郎を討つことになるその人なのである。

また、兄弟や新田四郎が遭遇したこれらの動物は、真名本『曾我物語』においては、ともに「——の大王」と呼ばれているのである。この「——の大王」という表現は、もちろんその動物の姿かたちが、通常よりも大きいことを示しているのであるが、石井進氏は、それだけではなく、この「大王」とは当時、その巨大さから「山の神のり移ったものと考えられていた」らしいことを推測されている。^⑩

このような兄弟と新田四郎との対比を、真名本『曾我物語』はなぜ語らなければならなかったのであろうか。先ず第一に考えられることは、このあとで兄・十郎をば討つこととなる新田四郎という人

物をここであらかじめ登場させておきたかったということである。

これは物語の展開からいっても至極当然のことであろう。加えてもうひとつ、ここで考えられるのは、「山の神のり移ったもの」である「——の大王」を、新田四郎は射止め、兄弟の方は故意にせよ射止めなかったとすることによって、今後の物語の展開を享受者に対して予告しているのではないだろうかということである。先の石井氏は、この「山の神のり移ったもの」を考える上で、『吾妻鏡』建久四年五月二十七日の条に記されている工藤莊司景光の記事に注目されている。少々長くなるが引用しておく。

爰に無双の大鹿一頭、御駕の前に走り来る。工藤莊司景光(割注省略)兼ねて御馬の左方に有り。此の鹿は景光の分なり。

射取るべきの由、之を申し請ふ。然るべきの旨を仰せらる。本より究竟の射手なり。人皆駕を扣へて之を見る。景光、聊か相ひ開きて弓手に通し懸け、一の矢を發ち射るに中らしめず。鹿一段許の前に抜んづ、景光押し懸けて鞭を打つに、二三の矢又以て同前にして、鹿は本の山に入り畢んぬ。景光弓を棄て、駕を安じて云ふ。景光十一歳より以来、狩猟を以て業と為す。而して已に七旬に餘るに、未だ弓手に物を獲らざる莫し。而るに今心神惘然して、太だ迷惑す。是、則ち山神の駕したるの條疑ひ無きか。運命縮まり畢んぬ。後日諸人思ひ合はずべしと云々。

各又奇異の思ひを成すの處、晩鐘の程、景光発病すと云々。^⑩

この記事について石井氏も「かれはおそらくこの事件がもとで亡くなったのであろう」と述べておられるように、山の神ののり移った獲物を射止めないことを不吉なことだとする考え方が、当時あつたと思われるのである。

そこで今、兄弟が「山の神ののり移ったもの」である「大鹿の大王」を故意にせよ射止めなかつたことによつて、享受者に対して、兄弟の身のうえに何かよからぬ事が起こるのであろうことを予想させることが出来るのである。すなわち、二人の哀れな最期である。

また逆に、新田四郎の方は、「猪の大王」を見事に射止めたのであるから、その後、兄・十郎を討ちとることが出来るわけである。つまり、山の神のお眼鏡にかなつたことになるわけである。ところが、この新田四郎が猪を射止めた場面、仮名本を見ると、彼が射止めたこの猪は、実は富士の山神であり、それを知らずに射止めた彼は、この後、二十七歳にして「不便なりし」最期を迎えることになる、とある。山の神ののり移った獲物を射止めることに對する考え方の相違が、この真名本と仮名本との相違として現われてきているのであろう。

兄弟が故意に射止めなかつた獲物、そして新田四郎が見事に射止

めた獲物、これらを「——の大王」と表現していること、それは、この後の物語の展開を、享受者に対して予想させることでもある。

そこにわたしは、狩獵のもつ宗教的性格の一面を垣間見ると同時に、真名本『曾我物語』がいかに狩獵・狩場というものに対して執着しているかがうかがえると思うのである。

このように見てくると、真名本『曾我物語』における兄弟の、終止助経を討たんとつけねらう姿というものは、主に狩場をその舞台として描かれていることがわかるのである。死を覚悟で必死に父の仇・工藤助経を追う兄弟の姿、それがごとく狩場に結び付けられれば結び付けられるほど、この兄弟の姿というものは、享受者の涙を誘うものとなるのである。宿願成就した兄弟も、また無念の死を遂げた工藤助経も、富士の裾野という狩場に刀の露と消えていったのであつた。

まとめ

以上、真名本『曾我物語』の展開に沿つて、先学に導かれつつ、本書における狩場の重要性を確認してきたわけであるが、それ以外つまり『曾我物語』のストーリーには直接関与しない部分においても、狩場はしばしば描かれているのであつた。ひとつ例を挙げると、巻二において丹波守保昌の出生譚が語られているが、その内容は、

彼は生まれてすぐに父・藤原元方に荒血山へ捨てられて、獵師に助けられ、育てられたというものである。この話は、平凡社東洋文庫の『真名本曾我物語』の注が、「ここに述べる出生譚の原處は不明。」と記すように、他に見ることのできないものである。

このようにストーリーに関係するものももちろんのこと、ストーリーには関係しない部分にまで、真名本『曾我物語』が、狩獵・狩場というものにこだわりつけていることはあきらかである。ではなぜ、狩場なのか。それは無論、兄弟の仇討が、富士の裾野の巻狩の夜に行なわれたからである。すなわち、狩場での仇討の、その動機づけとなる事件から狩場にかかわらせることによって、兄弟の執念をよりドラマティックに描きだそうとしているように思われる。それは、あたかも『平家物語』『天下の乗合』に見える史実と虚構の問題のようでもある。語り本系の『平家物語』が、『玉葉』や『百鍊抄』の示す史実を日付や場所について改作を行なっていることは周知のことである。この改作によって『平家物語』は、この「天下の乗合」事件をやられたら即やり返す、同じところでやり返す、という迫力あるものとして描きだすことに成功している。これと同じように真名本『曾我物語』は、物語の展開を狩場をその舞台として語りつづけることによって、狩場の仇は狩場にて討つ、という兄弟の執念を描きだそうとしているのである。

一見、退屈のように思えるこの狩場に対する物語の執着ぶりも、兄弟二人を中心とするドラマとして、その機能を果たしているように思えるのである。

注

- ① 福田晃氏「曾我物語とその周辺——真名本巻五浅間の狩説話を中心に——」〔日本文学論究（国学院大学）一三冊、昭和三八年二月〕
- ② 大津雄一氏「真名本『曾我物語』の狩場をめぐる」〔日本文学〕三〇巻一―号、昭和五六年一月）
- ③ たとえば、②の大津氏もそう述べておられる。
- ④ 角川源義氏編『妙本寺本曾我物語（貴重古典籍叢刊）』（角川書店昭和四四年三月）を私に読み下した。以下、真名本の引用に際してはこれを用い、引用の最後にその頁数を記す。
- ⑤ 仮名本は、この助継の死の前に、助親が別当に頼んで助継を調伏する場面を置いていて、彼の死をその結果としている。
- ⑥ 市古貞次・大島建彦氏校注『曾我物語（日本古典文学大系八八）』（岩波書店、昭和四一年一月）六八頁の頭注による。
- ⑦ たとえば、千葉徳爾氏「狩獵伝承研究」（風間書房、昭和四四年一月）にも「そこにそびえる天城山全域が今もやはり推賞されている狩獵地であった。」（二九九頁）とある。
- ⑧ これについては、①の福田氏にご指摘がある。
- ⑨ 五味文彦氏「吾妻鏡の方法——事実と神話にみる中世——」（吉川弘文館、平成二年二月）四四頁。
- ⑩ 石井進氏「中世武士団（日本の歴史二二）」（小学館、昭和四九年一〇月）六九頁。

⑪ 『吾妻鏡』の引用は、龍齋氏『吾妻鏡3』（岩波文庫 昭和十五年二月）により、適宜、表記を改めた。

⑫ 青木見氏はか編『真名本曾我物語1（東洋文庫四六八）』（平凡社 昭和六年四月）一二四頁。

〔付記〕

本稿は、一九九一年一月に同志社大学に提出した一九九〇年度修士論文の一部を基としているものである。また、それに先立って関西軍記物語研究会第十回例会（一九九〇年二月）において発表させていただいた。修士論文作成にあたって御指導を賜った加美宏先生、終始御助言を戴いた向井芳樹先生、生形貴重先生、佐伯真一先生にはこの場を借りて深く感謝申し上げます。また、発表の席上、貴重な御意見を賜った諸先生方に対してここに御礼申し上げます。

第三四号 要目（一九九一年三月刊）

特集 中世文学

延慶本における人物対比の方法……………宇野陽美（一）

——宗盛像をめぐって——

『平家打聞』巻六の慈恵説話について……………谷村茂（五）

——『言泉集』『私聚百因縁集』との比較から——

伊勢移住前後の西行について……………山村孝一（二六）

韓日語り物文芸における物揃え……………邊恩田（三九）

——『春香伝』と『浄瑠璃姫物語』の比較から——

資料 訓読『平家打聞』（一）（巻一―巻三）中世文学輪読会（五六）

複合動詞後項の位置づけ……………南場尚子（七）

君が目の恋しきからに……………吉野政治（九五）

——萬葉以前の接続助詞カラニについて——